市民文芸

短歌

令和五年度
阿南市文化祭秋季短歌誌上大会 選

特選

頬杖を突いた太宰に会えそうな嵐過ぎたる古民家の窓　森岡　圭子

じいじへと小さき腕を広げればお空に近づくことを悟りぬ　竹内　朋子

三本のブルーベリーの夏剪定かろやかな音遊ばせながら　小西　千恵

トラックに木材・瓦礫と積み分けて街から店舗がまたひとつ消ゆ　五島　秀子

五十年自然にできた不文律ぐっと抑える互いのダメ出し　森　マスミ

入選

百枚の棚田の稲穂豊かなり農夫の嘆く米の安値を　森岡　政子

難聴の夫は吾の声目で追いて眼で聴かんとすその瞳哀しき　吉形　和恵

初声は生命の神秘ありがたきトンネル出でし瞬時のごとく　手塚都樹子

発酵は引き受けましたといふやうに大桶立てり炎暑の庭に　中原きみ子

去る者は日々に疎しとするもよし自分の日々は密でありたし　川又　民代

刈り取られ干されし胡麻がプチプチと夜のしじまに実をこぼしいる　松村三千代

あの笑顔思い出させてゆっくりと回り灯籠二回目の盆　宮崎喜美子

俳句

阿南市俳句連合会 選

高原に揺るる芒や風車まふ　久米　浩一

回る寿司締めはケーキのクリスマス　藤井　一行

冬ざれやユンボ居座る痩せ畠　久米　千草

日々募る淋しさ部屋の白障子　石井　政子

山の友初雪降るとライン来る　野口　千代

天井絵も梁も墨色紅葉寺　表原　清美

院門の歴史重ねて大根焚　田上　隆敏

除夜の鐘補聴器はずす左耳　浜田百合子

池の水より盛り上がる落葉かな　小西　晴美

夕暮れの市場賑わう豊の秋　河内　おと

川柳

阿南川柳会 選

少ないが全て上げたい妻の笑み　神野　鈴代

支え合い米寿カップルプチ旅行　佐藤つたえ

たたみって何と尋ねる令和の子　多田紀久代

老妻が我を待ってる窓灯り　西田　修身

旅は吉出たが諭吉は渋いまま　橋本　征介

縁側から弾けるような笑い声　二階千代美

友からの電話心の隙間埋め　野村　敏子

一般応募

和紙よりも脆い気がする老いの骨　島尾美津子

会いたいと言っては会えぬ賀状来る　泰地　重美

クローゼット年齢不詳掛けてある　武田　敏子

漢詩

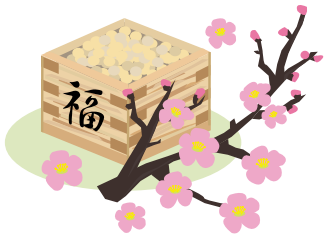
阿南漢詩研究会・青松吟社 選

偶感　荒瀬左知子

春風穏穏到山家　山家に到り
十里紅霞誘看花　看花を誘う
白髪朱顔人易老　人老い易く
已無跋渉静煎茶　已に跋渉無く　静かに茶を煎る

母校に過りて感有り　田中　公

偶聴教室惜歌終　偶教室に聴いて　歌の終わるを惜しむ
駒隙忽忽人不同　駒隙忽忽　人同じからず
曾仰青雲今白髪　曽て青雲を仰いで　今白髪
師恩萬丈恥無功　師恩万丈　功無きを恥ず

二月之晨　城満　航也

過辰頻見賀正人　過辰頻りに見ゆ　賀正の人
今日獨居私守貧　今日独り居て　私かに貧を守る
霜閉冰堅光白曙　霜閉じて冰堅し　光ける白曙
元來仙境一孤身　元来　仙境の一孤身